

「ビデオリフレクション」をめぐる

教職大学院では、通常の授業の中で、また「教育実践プロジェクト(学校現場での実践研究)」において、しばしば「ビデオリフレクション」が行われています。「ビデオリフレクション」とは読んで字のごとく、ビデオカメラで授業を撮影し、撮影した映像を複数の教員で見合いながら、撮影された授業のもっている様々な意味についてリフレクトする(省察する)ことです。今回は、この「ビデオリフレクション」について、教職大学院の教員としての経験をふまえながら、少し語ってみたいと思います。

◆「雰囲気」を撮る

授業を撮影する時、一番大切なことは、その授業の「雰囲気」を撮る、ということではないかと思っています。「雰囲気」なんて主観的なものだと思うかもしれませんが、そうではありません。授業を撮影している人自身が、既にある「雰囲気」の中にいる、とも言えるでしょう。硬い雰囲気の授業もあれば、やわらかい雰囲気の授業もあるでしょう。そして、授業の「硬さ」や「やわらかさ」がどのように生まれて来ているか、という、それはきっと、教師と子ども、子どもと子どもの関係性の質によると考えられます。

例えば、教師の子どもへの関わりが、単に教師の想定している「答え」を子どもから引き出そうとしているだけの時、授業の雰囲気は硬くなっているでしょう。一方、教師が問いを子どもにゆだね、子どもたちがどんなことを考え出すかをゆっくりと待つことが出来る時、授業の雰囲気はやわらかいものになっているでしょう。このように、「雰囲気」は教師と子どもの関係性のバロメーターであると言えます。ただ、「雰囲気」はなかなか言葉化しづらく、また、授業を検討する時、その重要性を取り落としていることもあるでしょう。でも、もし「雰囲気」に着目できたら、その授業の本質を捉え、自分にはない何かに目を開かれることになると思います。

◆「言葉」だけでなく

授業を撮影する時、「言葉」だけに注目しない、ということも大切な視点であると思います。例えば、大学院の授業の中で、院生に撮ったばかりのビデオ映像を見てもらっていた時、ある院生は、「言葉を発することなく両手でぎゅっと自分の身体を抱きしめている女の子」に注目しました。その院生は、「この女の子は、教師である〇〇さんの問いかけを深いところで受けとめて、そのことに係わる思いがあふれてきて、思わず自分の体を自分で抱きしめていると思います」と語ってくれました。

ややもすると、私たちは、授業は発言された言葉によって形づくられていく、と考えてしまうこともあるでしょう。でも、実はそうではなく、言葉にならない、もろもろの身体の動き、また表情等が表出され、それがまた他の子どもの表出をうながし、授業の「ゆたかさ」が形づくられていく、とも考えられます。そして、ビデオならば、それを撮ることが出来、またそのことの意味を味わい、検討していくことが出来ます。

さらに言えば、ビデオリフレクションにより、「言葉」にならない子どもの表出を捉えなおしていくことは、教師が授業者としての自らの子どもとの関わりを、よりゆたかなものに変えていくことにつながっていくと思います。

◆検討会では、「映像」を参加者に「ゆだねる」

ところでまた、撮影後の検討会、まさに「ビデオリフレクション」において大切なことは、撮った「映像」を検討会の参加者に「ゆだねる」、ということだと思います。撮影者は、当然、授業のある場面には「～な意味がある」ということを、是非、検討会の参加者に感じて欲しいと思っているでしょう。これは、とても大切なことですが、ただ、この思いが強すぎると、「映像」を複数の参加者の様々な眼でみて検討し合う、ということがうまくいなくなる危険性もあります。一つの「映像」が、どんな意味をもって現れるか、それは人によって異なります。そして、このように異なるからこそ、授業の「ゆたかさ」を多様な視点で捉えなおしていくことが出来るのだと思います。それゆえ、撮影者は、「映像」を参加者にゆだね、また新たな気持ちで、参加者とともに「映像」の意味を探索しよう、そう思うことができれば素晴らしいと思います。

以上のように、参加者に「映像」を「ゆだねる」ことは、実は授業の中で教師が自ら発した「問い」を子どもたちに「ゆだねる」とこととほぼ同じ行為であると考えられます。「ビデオリフレクション」の核心は、教師が問いを発しながら、問いを子どもたちにゆだねる授業の核心と深いところでつながっていると言えるでしょう。



「見方・考え方」 教育実践高度化専攻教授 松本 敏

学校教育は学者や教師だけを育てるわけではないのに、大多数の人にとっては忘れてしまっても困らないようなことをたくさん教えてきました。学校での成績と人生の豊かさは比例しません。しかもICTの発達によって忘れてしまっても簡単に検索できる世の中になると、そこで必要な力は、知識そのものよりも、知識の活用力、コミュニケーション力、情報処理能力、問題解決力等であり、これらは教科を超えて育まれ、汎用的に発揮されるものだと言われています。

かつては教科の学力を付ければこのような力は自然に育つと考えられていましたが、これらの力をもっとダイレクトに育てるべきだという考え方があり、今回の学習指導要領の前文と総則の書き方はこの考え方の表れと見ることができます。フィンランドのように教科縦割りの教育から総合的な教育へ移行する国も現れていますが、日本では教科ごとの学力も重視する方向を堅持しており、その二つをつなぐ概念が「見方・考え方」だと私は考えます。

教科を重視するというと授業もテストも知識量の重視に傾きがちなため、特に社会科にその傾向が強かったため、地理的な分野をはじめとして「暗記でない学力」を示すのに早くから「見方や考え方」の育成が強調されていました。新学習指導要領では、これを全教科・領域に広げ、整合性を取ったものと考えられます。

教科の学力は高いのに社会人として汎用的な能力を発揮できない人もいれば、その逆の人もいます。将棋の天才が社会問題について解決策を教えてくれるわけではありません。教科として構造化されてきた知性の分類は人類の財産であることを忘れず、同時に、人間の総体的な知の働きも大切にするというバランスの支点として「見方・考え方」が示されたと考えたらどうでしょうか。

《シリーズ:院生の声 ⑥》

教師の魅力

ついこの間、入学したと思っていた教職大学院も残りの時間の方が少なくなってきた。前期は主に、大学院で理論的なことを学び、後期は学校現場で実践研究を行う。多くの仲間が自分の所属校とは違う学校を実習先に選ぶが、私はあえて自分の所属校を実習先に選んだ。学級担任も校務分掌もない分、学校全体を俯瞰的に見ようと思ったからだ。所属校の先生方は、温かく私の研究に協力してくださる。私も、なるべく多くの研究成果を学校に還元したいと考え、日々取り組んでいる。

二学期、今年も実習が始まった。職員室にいと、どこからともなく、歌声が聞こえてくる。十月は学校祭、合唱コンクールの季節である。二年前、私も学級担任をもち、生徒とともに最優秀賞を目指して練習していた。その光景が昨日のように思い出される。「羨ましい。」

学級の生徒がみな同じ目標に向かって、進んでいく。時としてぶつかり合うこともある。しかし、それはより良くしようという思いが強いからである。うまく間に入って、まとめ上げるリーダーが育つ。どんどん頼もしく成長していく生徒の姿、集団が一つになっていく過程が目の前で起こるのである。

「教師の魅力って何ですか？」ある大学院生に聞かれた。答えられなかった。走っていると見えない景色も、立ち止まって見るとよく見えることがある。私は今まさに、その景色を見ている。生徒とともに困り、苦労し、笑い、そして感動している担任の姿は、今の私にとっても魅力的である。おそらく、教職大学院で学んでいる現職の先生たちも、私と同じ景色を見ているのだと思う。教師の魅力は存分に感じているのだと思う。

生徒が成長していく姿を見るためには、教師も成長しなければならない。人として、ともに成長できる場、それが学校なのだと感じている。現場に戻った時、私は魅力的な教員に映るのだろうか？

残された時間を有効に使っていきたい。

(2年 柴田哲朗)

良い集団とは

院生室での普段の会話を振り返ると、「〇〇さんがこんなことをしてくれたよ」「ありがたいね」「すごいなあ」「〇〇なところが素敵だよ」など、本人のいないところでその人の良さを語る言葉が飛び交っています。また、「さっき、こんな話題になってたんだよ！」と本人に伝える文化もあります。あたたかい言葉が、やわらかい雰囲気を作り、そして話す人・聞く人の笑顔を作ってくれていると感じています。だから、居心地が良いんだなあ……。

「当事者のいないところで良いところを語る」ということを、インターネットで広まった造語で「陽口(ひなたぐち)」と言います。昨年、『集団づくり論』という授業を通して、「良い集団とは」という問いをより強く持つようになりました。今後も考えていくことにはなりますが、今のところは【陽口がつたわる集団】が私にとっての良い集団です。私の問いに答えをくれた仲間たちに、今日も感謝の気持ちでいっぱいです。

来年度以降、現場に出させていただいてからも色々な集団に所属することになると思います。その時々で、良い集団とは何かを探り、築いていけたらと思います。



(2年 田村 光)

《編集・発行》 宇都宮大学大学院 教育学研究科 教育実践高度化専攻 (教職大学院)

〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350番地 Tel: 028-649-5242

<http://www.edu.utsunomiya-u.ac.jp/koudoka/index.html>

◇教職大学院Facebook: <https://www.facebook.com/uuptnet> ※院生が編集し、教員が管理しているFacebookです。

